

時事新報

政費の増加
維新以來我國の政費は次第に増加し年々その進むと見
て退くは實さき政府より預する毎年の歳計を見て知
るべし今その然る所以は如何と尋ねるに維新革命の政
策、萬機草創なる其上に相尋で内亂外征の事等あり爲め
に歳出の増加と致しよることもあらざり我輩を以
て之を見れば今の政費増額の原因は重に之を維新
以來文明の政に歸せざるを得ず抑も政府が年來西洋
文明の政治を熱心し兵制、教育、法律、土木、勸業の事
を勉めとして百般の制度悉く西洋風に倣ひ官吏の巡回
、學生の派遣、外國人の雇入、器械器物の買入など有形
無形の其外に海外諸國に在る外交官の交際又は外賣の
運送維持もしくは内外人の會合盛筵等文明の盛事を
以てしたる費用は實に莫大のものにして何れも政費増
額の源として見るべきもれかり勿論今の文明の世界に
獨立の體面を張らんとするには内の政治も外の交際も
租野質朴のみを以て居る可らざる人の知る所なりと
雖も古來理財の要訣に入と置りて出と爲すべしと云ふ
事あり即ち政府毎年の歳入若干あるべきと置りて之を
的として政費支出の額と定むべし一國の租税は國民負
富の度に適應して自ら踰ゆべからざるの限界あるもの
なれば假令へ出の要用あるも入の程度は之を忘る可ら
ずとの意味として理財上千古不朽の確言と云ふべし扱
この確言を根據として我政府維新以來の歳計如何を見
れば年々唯歳出の増加を見るのみにして曾て減少の實
なきは左に掲ぐる明治十年度より二十一年度に至る
政府歳計の表に就て見るべし

Table with columns for Year (明治十年度 to 二十一年度) and Revenue (歳入). Values range from 52,338,133 to 80,755,923.

(右の内十八年度の歳入の會計年度改正に付九箇
月間の計算なり)

右の如く歳入の年々増加するの止むを得ざる事情は出
でしものからんと雖も抑も一國歳入の其本源は國民の
實力より外ならず民の生産年々次第に増加の實あるに
於ては政府の歳出も亦年々増加して隨てその歳入に増
加するも取て差支なきこととあれども今や日本國民の實
力十數年來國の政費の増加と比例して増進せたる
の跡ありや否や我輩の知らざる所あり元來日本は農業
の國にして歳入の過半は地租より出ることあるに近來
十數年間その農業の特に進歩増加したる實なきのみか
農産物の増進は任々我輩の聞く所にして實力の増加など
と云ふは外の妙法なるべし左に掲ぐる外にして國內
の進歩は實に進歩の實ありあることなきを本
報は十數年來特に國民の實力を増したる歳計は

これ亦我輩の未だ曾て聞かざる所あり故に今假に國民
の實力は増すも亦不足することなく正しく十數
年前に同様なりとして此年限中に獨り歳入のみ増加し
来るは何ぞや政府歳出の増加するが爲めに之に應じた
るものなる可し即ち民力漸く實して歳入を増せし堪ふ
るが故に之を増したるには非ずして寧ろ政費の歳出増
したるが故に歳入をして其數に從はしめたることある
可し即ち政府の本意は一に斯民を休養するの外あり其
意は言にも發し文にも見る所あれども唯如何せん文明
の時勢に促されて斯る成跡に至りしことなる可き尙ほ
其上にも注目す可き明治十二年の頃には正貨と紙
幣と其價を異にし正貨一圓の紙幣一圓五十餘内外に相
當したるまどあり左れば當時の歳入六千萬圓と云ふも
其實は四千萬圓の負擔に過ぎざるが如き實ありしと
も今日自然らず銀紙全一一致して紙幣一圓は正しく銀
貨一圓に相對するとなれば金額上に相違なしとするも
其實は當時より比して五割内外の増額なるべきに況して
其金額上の増加甚しきま於てや國民の負擔は殆んど
一倍の重きに達したるものと云ふも可なり文明の盛事
誠に大切にして之を觀るは吾人の愉快と堪へざる所な
れども左ればとて泉源深からざる水流は終に一度の涸
るゝの日ある可し我輩の國の長計の爲めに忍ぶ可らざる
を忍び假令へ租野質朴の嘲を取るも從前の國を改
めて節儉の道に就き歳出を計て歳入を爲すよと歳入
に應じて歳出と定めんよとを祈るものなり

雜報

○獨逸新帝の敕諭
獨逸新帝ウイヘルム二世が去る
六月十六日陸軍一般へ下しよる敕諭に曰く我が獨逸陸
軍は余は深く景慕せる老帝を追悼するの情未だ消散せ
ざる今日再び余の慈愛なる父帝の不幸を吊ふよ及べり
余は此の悲むべき時に當り天帝の命に依り陸軍の都督
とありて兵馬の大權を掌握するに至れり余は始めて陸
軍に敕諭を下すに臨み余の祖先が汝等に愛國の大義を
曉ま此の感情常に汝等の腦裡に浮べるを自喜し喜悅の
情に堪へざるなり我々陸軍と軍神の和協の情は數十年
來一日の如く離平として扱べからず勇猛奮然なる老帝
及び新帝は汝等の尊敬する軍神の代者なれば余と陸
軍の關係は膠漆も離ならず有様なる故汝等が戰時平
時の區別なく余に忠誠を盡すべし余も亦祖先が地下よ
り余の行爲を監督せるを慮り汝等と共に粉骨碎身國事
のため心力を委ね他日黃泉の下に祖先と相會するの日
陸軍の偉績を語るべし又同日海軍へ敕して曰く余は慈
愛深き父帝フリードリヒ三世が遺然鬼籍に上りしよる
天帝の命に從ひ世襲の權利を以て獨逸帝國の支配者と
なり併せて海軍の總督となするを汝等も報告せし汝
等の昨年キールの海戦に於て海軍の隆盛を祝賀したる
老帝の崩御を追悼する衷情を脱するの際再び海軍の進
歩を賞せし父帝のため國旗を下すに及べりされど不
幸の時人心を固むる者なれば余は汝等と共に老帝及
び父帝の偉績を追憶し活眼を開いて天下の大勢に注目
すべし余は少時より海軍擴張に熱心し且つ汝等が能
く國家に對する義務を重んじ危急の際に一身を國旗に
下に懸つるも惜ずる者なれば余の今日悲喜に堪へざる
に際し汝等に對し余が赤心は獨逸國旗を輝せしめ
獨逸の船血を注ぐよあるを明言すべし斯くてこそ天帝
は我が獨逸と愛するなるべしと

後藤伯漫遊日録

(去る九日の紙上に續く)
七月七日 本日も朝より常處(即ち上田)并に隣村の有
志者來訪する者二十餘名、伯の懇談を聴き頗る感激の
色あり、從來此近郷は一般農業を以て著名なる處なる
に時しも盛卵紙を製する最中にして所謂一時千金の時
間なると斯く前夜より續々來訪して政事上の談話を聴
かんとするもの多きを視ても民心の傾向する所得て知
るべし此の、午前十一時發車屋代に休憩し途次川中嶋
を過た午後六時長野に達し藤屋に投ず此處は市街五千
餘戸山を負ひ廣野を控へ高亮宏濶實に形勢の宜しき
を得たりと謂ふべし、此日伯は觀音の門前を過ぎ觀れ
に左の二句と口吟したり至今狂態猶在、不訪三彌陀
一訪國民、と既に伯が會場を離れしや會員三百
餘名既に樓上に在り喝采して迎接せり會場は城山館と
谷づけ昨年の新築に係る者にして規模頗る宏壯其大さ
は東京井生村に過ぎ其高潔と風光の優美なるは遂に之
に勝る、やがて坐の定まるや會員小里順永氏(縣會常
置委員)立て開會の主旨を演べたるを待て伯は坐の中
央に起立きて時事の急務を切論し結局地方團體の己む
可からざる所以及び壯士と紳士の間に相忌むの弊風は
時機と誤するの本ざるを演べて大同團結を勸誘せり次
は橋本暢氏は維新以降自己が彈烟雨の中に經歷した
る事實を引證して信州人士の更に煽起して天下に爲す
べし所以を説く其他二三の慷慨なる演説あり右畢つて
置酒歡を過し夜に入つて散會せり歸途滿街燈を照し
以て伯の爲めに祝意を表するを見る盛んなりと謂ふべ
し、此日川中嶋を過ぎ松本氏左の一絶と口占せり
憶昔進軍渡此川 三千壯士吊何邊
憂時殘恨猶難止 曳杖再來是宿緣
山勢逶迤江勢奔 江山處處總傷魂
當年豪骨朽灰久 唯有江山千古存
七月八日 此日も早朝より伯に謁し請ふ者陸續來りた
るが從來長野縣下には紳士と稱せざるも財產家と壯士
ともいふべき有志者と兎角に相容れざる状態あり隨つ
て此れを調和するの必要なるより伯の午前中に壯士組に
接し懇切に當今の時務小異と捨てて大同を謀るべしと
説き午後には城山館に於て紳士組に接し維新以降廟堂
の經歷及び現今財政の弊を擧げて政治經濟の離る可ら
ざる所以を懇諭せらる何れも感懐せる中に隨分老年の
人々大に發明せる所ありし様に見受けしや要するよ此
行の大に其時機を得て民心の轉向一途に出づるのみか
らず伯の懇諭周旋なる誠心盡力を以て大に人心を挽離
し地方の繁榮を促すの結果ありと謂ふべし、我邦の
弊と云て貴紳の地方に漫遊する者概ね到る處、唯傲者
の風を遺すのみにて是も民情を察せず况や親く人民
を接して明かに思想を吐露するが如き其だ稀れし
て殊に民間に在て容易に知り難はざる内外の事情を公
然明示して以て方今の急務を報告せるは蓋し其事の一
時に快絶するのみならず其効果の他日に顯はるるもの
を得て期すべきのみ此日午後四時三十分長野を發し鐵路
途々山岳を経て北越に入り暮夜高田に到り紅葉館に泊
り、但し是より先新瀉縣の有志八木原繁、關谷貞太
郎の二氏は伯を長野に迎へて同行せり其他長野縣下
龍野、小池、立山等の數氏も送つて高田に來る
○製造事業の場所
年來府下に設立の會社にして何か
の製造を企てるもの皆多くは金一升土一升の都會に

工場を建
添へんこ
に謀りて
を得たる
の趣意を
るものと
原質と燃
の用あり
すして田
九州地方
寄せると
き燃料を
製造す
も何に
地其地
るまど
製造を企
製考へ
潤益の一
併有し
は一者の
より高價
だ策の
て結局府
合に工場
運賃の
或は工場
は工場に
遠きに非
品物を運
たるもの
る品を運
承知の
府民を
くるの得
とを
と思ふ
料人夫
建てん
を利益
の爲め
煙筒の
事な
米
はし由
あり
備に長
先づ外
做し得
を防ぐ
の南北